

水稲新品種「ミナミニシキ」について

内山田博士・新村善弘・蒔 篤・黒木雄幸・上野貞一・衛藤信男
(宮崎県総合農業試験場)

UCHIYAMADA, H., SHINMURA, Y., TODOROKI, A.,
KUROKI, Y., UENO, S. and ETO, N.
A New Rice Cultivar "MINAMINISHIKI"

水稲南海55号は、昭和50年から熊本、宮崎両県で奨励品種に採用され、通称名を「ミナミニシキ」として普及に移されることになったので、育成経過と特性の概要をのべて参考に供したい。

来歴ならびに育成経過

ミナミニシキは昭和42年宮崎県総合農業試験場において、南海43号(トヨタマ)を母、秋晴を父として人工交配を行ない、採種後直ちにF₁をガラス室で養成した。翌年F₂集団を養成し、昭和44年F₃において個体選抜を行ない、以後系統育種法によって選抜固定をはかってきたものである。昭和47年より南海55号の系統名で関係県に配布し、地方的適否を確かめてきたもので、昭和50年F₉で水稲農林237号として登録、通称名を「ミナミニシキ」と命名された。

特性の概要

1. 形態的特性 稈長はレイホウより約6cm短かく、穂長はやや長く、穂数は同ていどの短稈穂数型梗種である。稈の太さおよび剛さはレイホウ並で、止葉は直立し、草姿熟色は良好である。稈先色は白、稈色は黄白である。短芒があり、脱粒性は中、1次枝梗に対する2次枝梗の割合が少なく、粒着密度は中～中疎である。玄米は中粒で粒厚がやや厚く、整粒および光沢がすぐれ、腹白がなく、心白もわずかで米質はレイホウにまさりきわめて良好である。食味もレイホウ並かややまさり良好である。

2. 生態的特性 出穂および成熟期はレイホウより1～2日おそく育成地では中生の晩に属する。耐倒伏性はレイホウ並かやや強い。生産力はレイホウにややまさり、登熟がよく精糲歩合が高い。

葉いもち病にはやや弱いが、穂首いもち病には中～やや強である。しかしT2菌地帯での検定ではレイホウより明らかに強い。白葉枯病には耐病遺伝子をもたないのでレイホウよりやや弱い。紋枯病には中位で、縞葉枯病には弱いが日本稲品種のなかでは上位にある。わい化病にはレイホウより強く、ミズホよりは弱いトヨタマ並の中である。

一般特性

形 質	品 種 名	ミナミニシキ	レイホウ	ミズホ
出 穂 期 (月日)		9. 1	8. 30	9. 4
稈 長 (cm)		74	80	76
穂 長 (cm)		19.0	18.3	19.7
穂 数 (本/m ²)		369	363	323
芒の有無・長短		少・短	稀・短	稀・短
稈 先 色		白	白	白
脱 粒 性		中	中	易
倒 伏 抵 抗 性		強	強	極 強
葉いもち病 { 抵 抗 性 {	N・C T ₂	やや弱 やや弱	極 強 弱	中 中
穂首いもち病 { 抵 抗 性 {	N・C T ₂	中～やや強 やや強	極 強 弱	中 中
白葉枯病抵抗性 { わい化病抵抗性	I II	やや弱 やや弱	強 やや弱	中 中～やや弱
アール当り玄米重(kg)		48.5	47.6	54.8
玄米千粒重(g)		23.3	23.0	22.6
玄米品質		上下	中上	上下
検 査 等 級		3等中	3等下	3等下

調査地 宮崎県総合農業試験場

(昭和47～49年の3ヶ年平均)

適地および奨励品種採用県

現在レイホウの栽培されている九州の平坦部から山麓地帯まで広く適すると思われる。主としてレイホウを対象に熊本県では10,000ha、宮崎県では5,000haの普及が見込まれている。

栽培上の注意

栽培法はレイホウに準じてよい。1穂粒数が少ないので穂数を確保することが望ましい。また耐病性が十分でないのでもち病、白葉枯病、わい化病常発地での栽培をさけ、防除には十分留意する。

命名の由来

主な普及地帯が南九州であること、またミナミニシキの熟色、稔実がよいことを意味する。